

---

# Red Snow

楓猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e d   S n o w

### 【Nコード】

N 9 6 3 7 X

### 【作者名】

楓猫

### 【あらすじ】

平凡な日常をおくる主人公・藍川。彼の通う学校にやってきた転校生にはとある重大な秘密が・・・  
ヴァンパイアの王子様に目をつけられた哀れな主人公の行く末は？

## プロローグ

これは闇の民に君臨する王の物語・・・

## ～ prologue ～

それは太古より闇に生きる者。

『封印する気か？この俺を？』

それは気高く誇り高き者。

『したければ、すればいい。だが、ひとつ予言してやろう』

それは強き力を持つ者。

『遠くない未来に、おまえたちは俺を必要とする』

それは他者の血を啜り貪る者。

『必ずな・・・』

それは・・・

王はしばしの眠りに就く。

最も美しく最も残虐な獣が目覚め、牙を突き立てるその瞬間を  
夢見て・・・

## 出会い

日々の生活が単調でつまらないとかいうやつがいるが、俺にはよく理解できない。

忙しすぎる毎日を送る俺様にしてみれば贅沢な悩みだ。

だから、毎日充実しすぎている生活に、ちょっとばかりの物足りなさを感じているなんて、気のせいに決まっているんだよね・・・

キンコーンカーンコーン

お決まりの学校のチャイムが鳴る。

階段を駆け上がり、勢いよくドアを開けて一言。

「ふう〜、ギリギリセーフだぜ」

さすが俺だ。

「本当にギリッギリだな。藍川」

担任の川名が呆れた顔をしてこちらを見ている。

そんな顔をしていると最近せっかくできた彼女に逃げられるぞ、とは心の中で思うだけで言わないが。

「いや、俺の見事な滑り込みにそんな感心しなくても」

「誰もしとらん。自画自賛している暇があったら席に着け」

はいはい、と合図するように小さく手を振った。

俺の飄々とした態度に、川名もそれ以上咎めようとはしなかった。

俺の席は廊下側の1番後ろで、今まさに飛び込んできたドアに最も近い。

くじ引きで決まった席だが、我ながらいい勘をしていると思う。

席につくと誰かからの視線を感じた。結構な怒りのオーラをまとったやつ。

いやいやそちらを向けば、窓側の後ろから2番目の席で、さっきからクラス委員長がすごい顔をしている。

こりゃ、またお小言かな。気にしないけど……

これで、いつもならホームルームが始まるのだが、今日は少し違っていた。

「全員揃ったところで、転校生を紹介するぞ」

途端に教室が騒がしくなる。

遅刻ギリギリだった俺は当然転校生のことについてなど知らないが、普通こういうときは誰かしら情報通のやつから、事前にある程度情報が流れてくる。しかし、今日に限ってはそれもなかったようだ。教室全体が驚愕と期待にあふれている。

入ってこい、と川名がいうと、ドアが音もなく開いた。

瞬間、クラス全体が息をのんだ。

「今日からこのクラスの一員になる、篠原ひかる君だ」

みんな、仲良くするように、なんて担任のセリフは（俺以外の）耳には入っていないだろう。

「篠原ひかるです。これからよろしくお願いします」

転校生は美少年だった。



## 壁と涙

「なんでこんな時期に転校してきたの？」

「前いたのはどんな学校？」

「ひかる君かっこいいよね。彼女いるの？」

予想通りというか、なんというか、クラスの一部では人だかりができています。

その中心にいるのは、当然例の転校生である。

篠原は周りにできた人の壁に向かって、機嫌を悪くするでもなく、愛想良く質問に答えていく。

特に、彼女はいない、の一言に生きた壁（主原料は女子）は色めきたった。

脱色した感じのしない自然な茶髪に、白皙の美貌。

あまり男くさいイメージがないのが、おとぎ話の王子様でも想像させる。

「・・・・・・・・」

はつきりいって、どうでもいい。

転校生自身も、そのまわりではしゃぐ女子も、まあ、睡眠の邪魔にはなるが許容しよう。

だが・・・・

「おまえら、やめろよ。公共の場で泣くのは・・・・」

気色悪いよ、ホント・・・

大の男が涙ぐみ、ハンカチ取り出して、キーンッ！！とかやってる様子は、視覚的にも聴覚的にもよろしくない。

しかも、わざわざ俺の席の左右に陣取ってやることではないはずだ。

魔法の鏡によって、白雪姫（自分より美しい者）が存在することを告げられた女王の如く、悔しそうにしているのは、俺の友人の西岡と東山である。

そろって同じクラスの春崎玲奈のファンクラブに所属する熱狂的信者どもなので、周りからは東西コンビと呼ばれている。

よく二人で春崎の追っかけをしているのを、呆れて俺が見ていると  
いうのがいつもの光景だ。

こいつらの熱意が一割も理解できない俺にでも、こいつらの奇行の  
原因ぐらいはわかる。

当の春崎が壁の一部と化しているのだから。

が、それとこれとは別である。

何が悲しくて嫉妬にあふれた

「玲奈様……」

なんて男の涙声を聞かなければならないのか。

俺の精神衛生上よろしくない。

他のやつらは二人ほどではないにしても、やや複雑な顔をしている。  
生きた壁を突破することも、同化することもできなかったため、ク  
ラスの女子の関心を一気に集めた転校生を、男子は興味半分苦々し

さ半分で遠巻きに見ていることしかできなかったわけだ。

鬱陶しい・・・

さぼるか、と即決し足早に教室を出る。

後ろから東西コンビの恨めしそうな声が聞こえてきたが、無視だ、無視。

## 牙

さぼり場所が屋上なんていうのはある意味定番だが、俺のさぼり場所はさらにそのうえにある給水タンクの横である。夏場は暑いのが難点だが、この屋上に人はあまり来ないことと、この場所はちょうど下からの死角になっていて、誰かとかち合うなんてことはまずない。

少なくともおれがこの場所で過ごすようになってから、誰かに気付かれたことはなかった。

だからこの日、屋上に出るドアが開いた音がした時も、やってきた奴がいなくなるまで黙ってみていればいいと思ったのだが・・・

「ここがA棟の屋上よ。でも昼休みはガラの悪い奴らがうろついたりするらしいから、ここにはあまり来ないほうがいいわ。まあ、篠原君がそういうやつらとかかわりあいになるとは思えないけど・・・」

委員長かよ、見つかったらめんどくさいことになりそうだな。

クラス委員長の長谷川は、遅刻魔の俺（自分で言ってる微妙だ・・・）を目の敵にするお堅い女だが、どうやら転校生に校内を案内しているようだった。

それにしちゃ、委員長は楽しげだな。美少年相手じゃただの女になっ  
ちまうってわけだ。

そうからかってやろうかと思ったが、今出て行ったら出て行ったで  
面倒なことになりそうだ。自分から進んでさぼり場所を公開してや  
ることもない。

一方転校生のほうは、教室での時と同様柔らかな笑みを浮かべていた。  
紹介されてからずっと、笑った顔しか見たことがない。転校初日だ  
からかもしれないが、整った容姿と相まって、どの表情もどことな  
く作り物めいた感じが抜けない。気のせいかもしれないが……

「心配してくれてありがとう。委員長さんは優しいね」

篠原の発言で委員長は耳まで真っ赤になった。美少年の微笑みを間  
近で食らったらしい。

「や、優しいなんて……、そんな……」

「優しいよ。それに可愛い」

何だこの恥ずかしい会話は。

なんかここに居づらくなってきた。

かと言って出ていくのも野暮だし、本格的に寝ようか・・・

そう思っていた時だった。

「ねえ、委員長さん。僕の目を見て・・・」

甘い声。ゾクリと背筋が寒くなった。

再び視線を篠原に戻せば、転校生の雰囲気は先ほどまでとガラリと変わっていた。

慣れた手つきで委員長の顎に手をかけ顔を上げさせる。

それが視線を合わせるためだと気付いたのは、委員長の表情が消えていたからだ。

おそらくは、目があったと思われるタイミングで。

目は虚ろで、表情は無く、まるで人形のように・・・

どう考えても彼女の様子は普通ではなかった。

いったいどうなって……

篠原がかがむように委員長に近づいたとき、信じられないものが見えた。

笑うように開かれた口から飛び出した、犬歯というにはいささか長すぎる一対の歯。

——  
“牙”だ

それが委員長の首筋に触れるその瞬間。

「おいっ、おまえ！なにやって……！！！」



## 赤い瞳

「おいっ、おまえ！なにやって・・・！！」

思わず声が出た。

響いた声は、その場の雰囲気壊すのには十分だった。

委員長の目の意思の光が戻る。同時に男子生徒と密着した自分の状況に気付いたらしい。顔を真っ赤にして相手を軽く突き飛ばすと、そのまま校舎内へ走り去った。

ほっと息をつく、襲ってきたのは恐怖。

「」

篠原の口が何か言葉を紡いだのが見えたような気がした。

「あゝあ、逃げちゃった」

残念、とちつとも残念そうな感じはしない言葉が聞こえた。  
俺の後ろから・・・

勢いよく振り向くと今度は正面から声がした。

「久しぶりの食事だったのに。どうしてくれるんだよ」

動けなかった。身じろぎさえできない。

感じるのは未知の存在への恐怖と、そして・・・

——抗いきれない赤い瞳の束縛・・・

「なんで・・・目・・・赤い・・・」

転校生の目は色素の薄い髪とおなじ薄茶だったはずだ。  
だが、今そこに存在するのは、血を思わせる真っ赤な瞳。

「見られちゃったものはないな・・・」

軽い溜息のあと感じたのは、首筋に熱。

「——ッ!!」

声にならない悲鳴をあげて、俺はそのまま意識を手放した。

## 雲を数えて

ひちやり・・・ぴちやり・・・

ぼんやりとした頭に、濡れた音が響く。

何かが首筋を伝って動いている。

そのたびに薄茶色の髪が顔にあたってくすぐったい。

見上げれば、青空に雲が流れていく。

俺、いったいどうしたんだっけ・・・

確か屋上にサボりに来て、委員長と転校生が・・・

「――!!?」

あわてて跳び起きようとすれば、予想外に強い力で抑えつけられ、身動きができない。

首筋の感覚に、戦慄する。

ライオンが捕まえた獲物の喉笛に咬み付いて、息の根を止めるシーンが思い浮かんだ。

獲物を捕まえた肉食獣ながら、俺を逃がしてくれる気はないらしい。

人の姿をした魔物は、何度も首筋に舌を這わせる。

僅かに感じられる鉄の匂い。

血を舐めとっているのだ・・・

痛みはなかったが、舐められているあたりがじんわりと熱を持っているのが感じられた。

もう抵抗する気は起きなかった。

どうやっても逃げられないことを悟ったのもあるが、なんとなく命をとられる危険はないように思えたのだ。

「怖がらないの？」

不意に声がした。

その時俺は流れていく雲の数を14まで数えたところだった。  
おまけに11番目の奴は林檎にみえるよな、とかどうでもいいこと  
を考えていたので、

「ひえわぁ!？」

とか妙な反応をしてしまった……

俺の上に乗っかっている人の形をした魔物は、一瞬固まり、その一  
瞬後には嘔き出した。

魔物とは思えぬ様子で、腹を抱えて爆笑している。

「おい、コラ……」

じろりと睨めば、目が合い、笑いがやんだが、またすぐ再燃する。

つぼに入っただろうか・・・

というか、魔物に大爆笑される俺って・・・とちよつと微妙な気分になった。

ひとしきり笑い終えて、（それでも口元がひくつきそうなのが気になるが・・・）さっきまで俺の血を舐めていたとは思えないほど爽やかに

「決めた。君にするよ」

と美少年の姿をした魔物はのたまった。

「へっ？」

脈絡がない。一体何をだ？

「君、今日から僕の餌ね♪」

・・・・・・・・・はぁいいいつつ!!?・

意味わかんねえよとか、♪なんかつけてんじゃねえよとか  
いろいろ言いたいことはあった。

が、言えなかった。

ものすごい素早い動きで口をこじ開けられ、俺の舌を魔物がつまんでいたので。

「次はここに咬みついてあげようか? きっと血がいっぱい出るだろうね」

前言撤回。

命の危機を今現在スペシャルウルトラコースで体験中。

死因は出血死になるかな? 窒息死かな?  
なんて笑顔で言っちゃってくれていた。間違いない、こいつは正真正銘の魔物だ。



「もちろん、君に拒否権なんてものはないよ」

これからよろしくね、と告げる転校生の笑顔は、教室の時とは違い、本物であつたに違いない。

だが、その輝ける微笑みに、俺は平和な日常がかき乱されていくことを感じざるおえなかったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9637x/>

---

Red Snow

2011年10月27日04時26分発行